



保険毎日新聞「都道府県代協 会長の素顔」

遠藤会長が紹介されました

岩手県代協 第13代会長 遠藤 真喜男氏

手話を活用した顧客対応も

岩手県に「銀河鉄道」(正式名はIGRいわて銀河鉄道)という

道がある。郷土の作家、宮沢賢治の作品名に由来する路線で、盛岡駅から北へ伸びる。今回、「代協会長の素顔」に登場願う岩手県

都道府県代協 会長の素顔



遠藤氏

測量会社の測量技師。航空写真では隠れた地上を測量したり、山の三角点に標

代協の遠藤真喜男会長の事務所(スマイルプランナーズ)は、その途中の「厨川(くりやがわ)」駅から10分ほどの場所にある。遠藤氏の前職は航空

識を置き、航空写真との歪みを修正して測量地図を作製したりする仕事だ。正確な地図を描くためには、航空写真を実際の距離と合わせるコンピュータ処理が必要となる。大型施設や高速道路などの土木工事は、こうして完成させた地図があつて作業に着手することが

できる。測量技師という、保険とは全く関係のない異業種からの転職。なぜ、遠藤氏が保険業界へと足を踏み入れることになったのか。それは自分への追求心から

遠藤氏は「正直であれー」という座右の銘を心に、畑違いの保険の営業に精進していた。誠実さを大切にするとこの言葉は、遠藤氏の日々の活動の

中でも具現化されている。

遠藤氏は現在、盛岡市ボランティア連絡協議会会長も務める。盛岡市では100以上の福祉団体や障害者団体が集まり、ボランティア連絡協議会を作っている。今年の8月にはその中の36団体が集い、盛岡市ボランティアまつりを開催。多くの参加者がかまきまな体験を楽しんだ。毎年、東日本大震災の被災地を視察し、災害を風化させないような活動も続けている。

ランティア団体と関わりを持つようになった背景は、研修生時代に出会った聴覚障害者の自動車保険契約があつた。最初は手話通訳を交えての契約だった。しかし、次第に「自ら説明したい」との思いが強くなり、手話を学んだ。契約者にも絶対に手話を覚えることを約束した。

遠藤氏が難しい保険をかみ砕き、手話で分かりやすく伝えることで、聴覚障害者の理解は進んだ。契約書の重要事項などは読んでもらつた上手話で伝える。また、事故の時も遠藤氏は現場に駆け付けるようにしている。事故の連絡はメールで入るが、現場では警察官も手話は分からないため、筆記で行う。多くの聴覚障害者は相手の口話を読み取り、筆記で答える。遠藤氏が現場に行くことで、聴覚障害者の安心感は格段に高まる。

その遠藤氏が岩手県代協会長に就任して1年が過ぎた。現在の代協の課題の一つが、情報温度差だ。日本代協からの有益な情報が県の会員すべてに浸透

しているかといえば、まだ改善の余地があるという。代協活動のメリットは、業界で今、何が起きているか、行政はどのようなことを考えているのか、そうした業界全体の動きがスピード感を伴って現場に降りてくることだと遠藤氏は指摘する。岩手県では現在、直営代理店が力をつけ、大型化が進んでいるという。個人代理店などが吸収されている状況が顕著だといふ。そうした環境変化の中、会員増強に向け指揮を執る遠藤氏。広大な岩手県をどうまとめ上げていくか。その行き先を震災の復興とともに見届けていきたい。

【遠藤真喜男氏プロフィール】1999年、保険会社の研修生を卒業し個人代理店をスタートし、同時に代協に入会。2008年に代理店を法人化。県代協の一般社団法人化以前は、遠藤氏の代理店が県代協事務局を兼務していた。県と北東北ブロック企画調整委員長として日本代協に向。その後、県代協会長に就任。